

日本語支援から意味ある実践への拡張に向けて

—地域に開かれた日本語教室活動—

Support for Not Learning Japanese Participating in Japanese Society:
Activities of a New Local Japanese Class

茂木真理・石原弘子（にほんごの会くれよん）

MOTEGI Mari, ISHIHARA Hiroko (Crayons Nihongo)

要 旨

近年、地域日本語教室では、従来の日本語学習支援を行うだけではなく、学習者の社会参加を後押しする活動も計画、実践されるようになってきた。多文化共生社会の進む日本で、学習者ひとりひとりがその特徴を生かし、日本人との意味ある関わりの中で生活できるようにとの願いの上に行っている事例を報告し、今後の地域日本語教室の役割について考えていきたい。

In recent years, local Japanese classrooms not only support Japanese studies, but also plan and conduct activities that will support students' participation in society. I would like to consider the future role of local Japanese classrooms where we hope that each of the students will make use of his/her individual talents and interact with the Japanese in a meaningful way in Japan, where a variety of cultures exist side by side.

【キーワード】 地域日本語教室、ひとりひとり、意味ある関わり、社会参加、梯子かけ

1. はじめに—地域で日本語を伝えるということ

近年、地域日本語教室では従来行われてきたような日本語学習支援だけではなく、多文化共生社会の構築に向け、地域の状況を踏まえた工夫をこらした活動が行われるようになってきた。長野のように経済的基盤もあり、専門家や行政との連携もとれた大プロジェクトでの試み（平高 2008）も報告されている。また、徳島のように日本語学習支援とは、その人がことばを学ぶことによって、社会活動に自ら参加し、自立していくための支援でなければならない。そしてその支援を通して支援者も成長することにより多文化共生の社会を実現しよう（元木 2005）としているところもみられる。

次に紹介する詩は、その徳島で日本語支援を受けているフィリピン女性のものである。この詩は地域で生活する外国人の気持ちを端的に表している。

前は私は何でもできた　でも、日本に来てから何もできない　わからない
周りの人が教えてくれた　わたしも聞いた
もっと知りたい、勉強したい。
少しずつわかってきた。
私は、毎日ゆっくりと歩きつづける。⁽¹⁾

このような、自国で生活していたときと同様な社会人としての生活を日本でも確立しよ

うとの学習者の思いを私たち支援者は真摯に受け止め、応えていかなければならないのではないだろうか。

本報告では、従来の日本語学習支援と併せて、教室内のバーチャルな場面設定や状況作りを超えた実践の場の提供を試みた地域日本語教室の事例を紹介する。

2. 地域日本語教室の実践 — 「にほんごの会くれよん」の場合—

1) 設立, そしてみえてきたこと—乳幼児をつれて参加できる日本語教室

筆者の一人である石原は1998年末、大阪から目黒区に転居し、乳幼児を連れて外国人の参加できる日本語教室がないことに気がついた。同時に、大阪にはなかった保育室付きの施設があることにも気がつき、その施設を使って、2000年3月末、乳幼児といっしょに参加でき、日本語が学べる場「にほんごの会くれよん」を立ち上げた。週に1回、保育室で、親は日本語の学習ができ、子どもは親のそばで遊べる。支援者も子ども連れて参加し、個々の学習者の日本語と生活などをサポートしていく。子どもを連れていない学習者も受け入れ、子どもといっしょのグループと大人だけのグループの両方で始めた。

親と子が同じ場所にいることで次のようなことがらに気付いた。

ひとつはアジア、アフリカからの人たちが母語での育児に積極的でないことである。欧米系の女性は母語で育てる人が多いが、アジア、アフリカの女性は、母語で育てる人が少ない。アジア、アフリカの人でも短期滞在の人は、日本語と母語の両言語を大事にしており、国際結婚した多くの人は、子どもを日本語で育て、日本の良い大学に入れ、良い仕事に就かせ、自分から離れないでいてくれることを願っているように見受けられた。夫から、「自分のわからない言葉で、子どもに話さないでほしい」と言われた人もいる。また、家族の中で母親だけが外国人の場合、早く、日本語を上手になって欲しい、子どもを日本人として育てて欲しいという周りからの有言、無言のプレッシャーがあり、母語で子どもに語りかけられないということもあるようだ。また、彼女たち自身も、「私の言葉なんて、ここでは必要じゃないから」と、母語を否定していることも多いことが分かった。自らのことばを引っ込め、習得途上の日本語で育児を行っている中に、本来彼女たちが持っている多くのことが子どもに伝わらずにいる危うさに直面するのである。

もうひとつの気づきは、外国人は情報を得にくいという事実である。日常の生活情報、育児情報についても生活範囲の狭さやことばの問題で情報を得ることは難しい場合が多い。ここでは以後の私たちの活動に直接つながっていった子どもの発達には欠かせない絵本について述べることにする。

日本では、子どもの読書活動推進運動が盛んで、国では2000年を子ども読書年と定め、2002年の基本計画には、「すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備を推進することを基本理念として……」とある。小、中、高すべての学校図書館に司書教諭の配置が義務付けられているし、また、赤ちゃんに本を手渡すブックスタートという事業も現在では全国の1/3の自治体で行われている。その絵本を手渡す4ヶ月児の健診は外国人をも含め100%近い受診率であるにも関わらず、配布される絵本は日本語で書かれたものに限られている。図書館の外国語絵本の所蔵率も低く、国立国会図書館国際子ども図書館の所蔵を見ても、日本の絵本の海外版は出版社の献本に頼っているのが現状で積極的に集書されていない。

図書館でも出版界でも、在住外国人の子どもに日本語以外の本が必要だという認識は薄く、日本語以外の絵本の入手がむずかしい。あったとしても欧米のものが大半で、アジアのものは少ない。「子どもに絵本を読んであげよう」というメッセージは、日本の子育てに関わる施設のいたるところで発信されているが、外国語で書かれた絵本はまだまだ彼らの手元に届いておらず、母親のなめらかなことばでの読み聞かせの実現は難しいようだ。

このように、子育ての中での使用言語の問題、情報を得にくい中での子育てという現実的な問題のほかにも、自分が本来の自分ではないという不安感を持って生活している様子が垣間見られた。それは日本語を習得するだけでは解決できないことで、母国での生活でできたこと、してきたことのひとつでもいいから日本でも実現できるという何かが必要だということだった。そこで、私たちは学習者が社会参加するきっかけの場を作り、地域日本語教室から社会へと生活の場を拡げるための梯子をかけようとさまざまな活動を計画した。

2) 母語に誇りを、そして社会参加へ —図書館、いろいろな言語でのお話会—

絵本にはストーリーのあるものだけでなく、親子で遊べるわらべ歌、手遊び歌、子どもの歌、言葉遊びなどいろいろある。豊富な絵本があり、親子読書運動が盛んであるにもかかわらず、法律がすべての子どもにと謳っても、本がなければ、親の母語は弱い言語にならざるをえない。子育て文化が親の記憶にしかなくて、日本語のみで育児をしたら、母文化も日本文化も十分に成長しないことになるのではないだろうか。

母語での育児を応援するには、絵本を母語に翻訳すること、公の場でその訳を発表すること、その姿を子どもに見せることが有効なのではないかと考え、2006年2月、目黒区の八雲中央図書館のお話会で、日本語と外国語で絵本を読むということをはじめた。「にほんごの会くれよん」に参加している学習者だけでなく、地域に住んでいるいろいろな国の人に協力してもらって、自分の得意な言語で絵本を読んでもらっている。日本語は、当会の日本人会員が読んでいる。お話会に聴衆として参加する子どもたちが、外国語は英語だけでなく、自分の住む地域にはいろいろなことばを話す人がいることを知るという効果もある。

読む絵本は、原作が日本の出版物で、海外版が入手できれば、それを使い、なければ、「にほんごの会くれよん」の通常の活動内で日本語学習の一環として翻訳をしている。教科書ではない「絵本」をテキストにして、支援者と力を合わせてよい作品になるように翻訳していくのである。その人の母語を知らない支援者と、日本語習得途上にある学習者が行う作業なので、完成した作品が完全なものといえないだろうが、翻訳過程でのお互いのやりとりは真剣で、これこそが意味あるコミュニケーションだといえるものになっている。そして出来上がった作品の母語の響きこそ、その言語の持つ美しさ、力強さ、優しさを感じさせてくれる何よりの伝え手となってくれる。

聴衆の前で、自らのことばで、お話を語ることはまさしく日本での社会参加の第一歩となっている外国人会員が多い。その日は普段着ではないよそいきの服装で、みなきれいにお化粧をして来てくれる。公の場で仲間と、日本人会員と一っしょに対等な立場でひとつの場を共有できる貴重な機会である。

なお、著作権の問題は、2006年5月に児童書4者懇談会という機関から、「お話会・読

み聞かせ団体等による著作物の利用について」という手引きが公表されているので、これに従えばよい。ボランティアの活動はほとんど問題なく許可されるようである。

3) 目黒区との協働事業

2008年4月から目黒区との協働事業「外国人親子の絵本とのはじめての出会い事業」を実施している。この事業を私たちが企画立案したのは、まずは育児の最初の段階で、子どもと絵本についてのメッセージを母親のいちばん得意とすることばで伝えられるような環境を整えたい、そして日本語を学びコミュニケーションがとれるようになった先輩外国人が後輩外国人をサポートできるような循環が作れたらとの思いからである。

従来目黒区では10～11ヶ月育児学級で図書館職員が絵本の紹介を行っていたが、外国人の参加は皆無であった。私たちは、この原因が広報の不十分さと参加対象となる母親の言葉の問題にあると考え、具体的に以下について提案し、当年4月より協働実施している。

- ① 広報を多言語化し、4ヶ月健診の案内を送付時に育児学級の案内も同封する。
- ② 当日配布資料として、多言語小冊子「外国語でもよめる0歳からの絵本」を8ヶ国語（日本語、英語、中国語、韓国語、タガログ語、タイ語、インドネシア語、ロシア語）で刊行（2008年4月）。なお、翻訳の多くは当会の外国人会員があたった。
- ③ 検診当日、当会の外国人会員が通訳として参加する。
- ④ 外国人通訳者がスムーズに仕事ができるよう、協働事業提案者がコーディネータとして参加する。

育児学級へ外国人親子の参加を促す試みを上記のように始めたものの4、5、6月には該当者は現われなかった。7月になり初めて希望者があり引き続き8、9月にも希望者があり、少しずつこの事業が周知されはじめたという手ごたえを感じている。

一方支援者となる通訳には「にほんごの会くれよん」の学習者が応募してくれ、意味ある実践を体感している。中には自国で児童福祉士だった人や児童書の出版社で働いていた人もおり、自らのキャリアを役立てようとまだ不十分な日本語のブラッシュアップに励んでいる。

4) 自分の国の文化を伝える—MIFA フェスティバル参加

2008年2月に開かれたMIFA（目黒区国際交流協会）主催のフェスティバルで当会会員のミャンマー、ウズベキスタン、韓国の学習者が「いろいろな国の文字で名前を書こう」というコーナーのボランティアを依頼された。時間を区切って2ヶ国の出身者がブースに待機し、訪れる人に簡単な挨拶や名前の書き方を教えるというものだった。いつもは日本語を学び、支援してもらった学習者が立場を逆転し、伝える立場になるという経験をした。

また、子ども広場では、フィリピン出身のお母さんたちの指導で彼女たちの子どもが、お母さん手作りの衣装を着てフィリピンのダンスを踊った。母子ともども本当に楽しそうで、聴衆にも大好評であった。日常では隠れがちな母の文化を子が受け継ぐいい機会になったようで次回もと張り切っている。

3. 社会参加への道筋 —学習者の想い—

前節では、「にほんごの会くれよん」の歩みの中で明らかになったこと、気づき、そし

てそれらの問題を緩和するために行ってきた試みを紹介した。ここでは、その試みに参加した外国人会員の感想や想いを自らが記した文や談話を載録することにする。これこそが私たちが行ってきたさまざまな試みへの評価、振り返りとなるものと考えからである。

日本語力に関係なく、社会参加することの意義を示すものでもあるので、誤りも見られ、また量的にも多すぎることも懸念されるが、あえて修正せず、削らず貴重な学習者たちの文、談話を生のまま載せることとする。

1) 絵本をつかった日本語クラス⁽²⁾の活動を通して

李 原翔⁽³⁾

「絵本をつかった日本語クラス」に参加した最初の頃は、絵本は成人参加者の日本語学習にどうつながっていくか、多国籍のメンバーの活動はどう展開するかと予測がつきませんでした。この活動に参加し続ける勇気を与えてくれたのは、図書館で見かけた子どもの笑顔と日本人のお母さんたちからのコメントでした。はじめて、読み手として図書館で多言語読み聞かせに参加した時、子どもたちが聞いてくれるだろうかと不安でした。子どもたちは、時々「分からない」といいながらも、日本語版の「大きなかぶ」の中国語訳を、一緒にリズムに乗って真似をしてくれました。活動終了後、日本人のお母さんが「歌のように聞こえます」「とてもきれいですよ。次はいつですか」と言ってくれました。とても嬉しかったです。これまで、日本語のハンディや疎外感などで、地域活動に関して敬遠してきましたが、この体験は私にとってとても貴重なものとなりました。

絵本の通訳を通して、文化の違いや絵本の表現の面白さ、翻訳の難しさなど改めて気づくことが多く、辞書をめくることも多くなりました。自宅で訳した文章を声を出して読んでいるうちに、子どもたちも自然に覚えてくれて、親子で国際交流フェスティバルの多言語の読み聞かせにも一緒に参加することができました。中国語に興味のない娘も「とても楽しかった。また参加したい」といい、また、これがきっかけで、当時、小学校5年生の息子が学校の音読発表会で中国語で漢詩を朗読しました。どういう言葉で子育てをすればよいかという戸惑いを持つ外国人の親が多いです。「絵本をつかった日本語クラス」は、外国出身の親に母国語で子育てしてもいいという安心感を与えてくれるだけでなく、絵本という身近な存在の活用を通して、異国での育児のあり方や親子のコミュニケーションのとり方について具体的なモデルを示してくれました。研修会でのグループ発表では、母国語で絵本を読み聞かせているお母さん達の表情は、実に生き生きとしており、他の場面で見かけない元気なものでした。外国人の親には、子育てしながら、日本語の勉強ができる環境、また安心して母国語で子育てができる環境、さらに日本語が使いこなせなくても社会の一員として自信を持って地域活動に参加できる環境が必要です。

「絵本をつかった日本語クラス」の活動では、日本人ボランティアと外国出身の人々は教えると学ぶ立場であると同時に、共にアイデアを出し合ったりして、活動の企画を考えたりする仲間同士でもあります。クラスの中には日本人と外国人が隔てなく過ごす、日本語がうまく言えない外国人でも堂々といろいろ提案したり、積極的に活動に参加したりしています。絵本は言語学習や異文化理解において、一つの道具に過ぎませんが、「絵本をつかった日本語クラス」では、絵本を活かすことによって、絵本は、親子のコミュニケーションの架け橋であると同時に、言語や文化学習の教材でもあり、異なった国の人間同士

が異なった語りで共同作業できる素晴らしい素材でもあります。この絵本を中心とした学習活動は、人々にいろいろな感動や喜びを与え、またさまざまな出会いやきっかけを作ってくれました。「絵本をつかった日本語クラス」の趣旨は、今後の国際交流活動などで活かされれば幸いです。

2) 絵本の読み聞かせ会に語り手として参加して (2008年3月記)

Fさん (中国, 女性, 日本人の配偶者)

今回はそのお話を、30年ぶりに中国語で読んだので、とても懐かしい感情が芽生えて、心をこめて読むことができました。それで読むのが上手になったねとみんなに褒められて、とてもうれしかったです。その絵本は私の父が読み聞かせてくれた絵本でした。父がその絵本の意味を教えてくださいました。それは‘人間は悪いことをしてはいけません’ということでした。今でもはっきり覚えています。小さい頃の記憶力はすごいですね。他にもいろいろな絵本を読んでくれました。今は父が私にしてくれたように、子供に絵本を読んであげています。子供が大きくなったら、そのことを覚えていてくれるといいなあと思っています。これからも日本語を勉強して、日本のことをもっと知って、日本語がもっと上手になったら、中国のいい絵本を自分で訳して、日本の人たちに読み聞かせてあげたいです。

3) 目黒区との協働事業に参加して (2008年7月談)

Oさん (中国, 女性, 夫の仕事で滞在中)

実はね、今まで勉強した日本語をですね、生かしたい、能力を試したい、そして本当に人の役に立つですね、ということは幸せなことだと思って・・・。
私は実は最初に日本へ来て、そのときですね、とても怖い、あのなんか日本語がまだできない状態だから、本当にボランティアに助けってもらって、その本当に感謝の気持ちは一生忘れない。最初幼稚園に通う段階ですね、あの、園長先生は私が日本語でおしゃべりできない、だから困っていました。どういうことかということ子どもが、あの登園の準備ですね、タオルとかいろんな物が説明できなくて、困っていました。そのとき、区役所でボランティアと出会いました。最初のボランティアでした。なんか、子どもが必要な物を中国語で説明してくれました。中国人のボランティアですね。本当に流暢な日本語を使って、私はなんか間違え、中国人、日本人？こんなに上手に話せて・・・。やはり昔中国に住んでいました。その経験があります。中国で小学校の5年間を通っています。やっぱりあの人は日本人だ！最初は中国人と思ったのに、その人は結局日本人だったのです。日本人から助けられました。いつでも困ったことがあったら連絡してくださいと、電話してください、メールアドレスも教えてくれました。これが最初にあったボランティアです。

もう一回は幼稚園ですね。保護者会するとき、園長先生はボランティアを要請しました。私はそのときびっくりして、知らないときですね、中国人の学生です。日本に住んで6年以上の人でした。日本語ですね。そんなに流暢とは思わなかった。でも一生懸命私の話したいことを伝えてくれました。でも、どうしてみんながこんなに笑っていますか、わからないです。彼女は本当に私の話したいことを伝えてくれているかどうかわからないです。自分でチェックできない。でもみんなずっと笑っています。だから通訳のせいだな。こんなに笑っています。私はなんかドキドキしていました。こんなに本当に一斉ですね、私の

顔を見て……。私はどうしようという気持ちで。通訳がいると直接自分の気持ちとか伝えることができない。やっぱり自分の言いたいことを自分でみんなに言おうと考えて、それで一生懸命本当に日本語を勉強しようと思った。

2週間後ですね。くれよんという組織を知りました。夫が連れて行ってくれました。最初もう3歳の子供がですね、日本の習慣とですね、中国の習慣が全然違います。例えば畳の部屋ですね。あの、児童、区役所の3階ですね、児童館、児童保健センターありますね。あそこで子供がなかなか靴を脱ごうとしないで、だから親が逃げてしまうかもしれません。という不安ですね。親の不信感や信頼感ありますね。でも友達を作ってほしいというなんか、私は抱いて靴を脱がないで、ほかの友達と一緒に遊びました。子供も興味津々です。どうして私とほかの人とことばが違うんですか。どうして、そこでおもちゃとか絵本とかいっぱいです。みんなどうしてこんな楽しそうに遊んでいますか。というなんかそういう表情をみせていました。そのときちょっとよくわかんない。なんか子供が夢中になっているうちに密かに靴を脱がして、それから子供はみんなと遊びました。そのとき知りました。みんなボランティアです。最初わかりませんでした。中国にいるときは日本はみなお金を使ってなんか、でもみんな無料ですね。だから本当に驚いて、日本にこんな場所があるなんで、日本はどこでもお金を使うと思っていたから。だから、この世の中にこんなに自分の関係ない人にこんなに相手の人に親切に家族のように考えてくれて有難いと思った。だから自分もボランティアとして、みんなにもし役に立てれば自分も幸せな気分になりました。実は人に助けてもらって自分も本当にありがたいな、幸せになる気持ちですね。

協働事業の場で「いないないば」を日本人の赤ちゃんに読んで、なんか子供をですね、あまりかわいくて私自身も子供が好きですから。でも最近私は子供に対してちょっと厳しいでしょうか。でも本当にかわいい子供をみて、うちの子供もこんなにかわいい時期があったな、なつかしいなという気持ち、女性の本能のなんか、子供に対する母性とかかわいてくるんですね。読んであげた赤ちゃんは、どこかで会ったら、私の顔を覚えていてくれるかもしれません。

最初は不安で、力がぬけなかった。

今日本語を通して、自分の自信をとりもどすことができました。

協働事業に参加しようと思った動機は、私は子供が3歳の時ですね。あの保健所に行ったことがあります。そのとき通訳がいなかったからなんかみんなの顔ですね、もし笑って、笑顔ですね、大問題なくですね、手を振ったり、足を振ったりということを教えてもらって、その先生たちは本当に自分の話したいことをわたしに正確に伝えたいです。でもだれもそのとき通訳がいなかったので私はなんか不安一杯です。もしその時通訳がいれば、不安も解消でしょう？だから今度は、もし私のような人がいれば、助けようとか、相手に温かさを、人間的な温かさを伝えたいです。くれよんのおかげで木曜日ですね、一日だけでも、家族のような存在です。私にとって。

今日本に住んで4年になりました。けど、社会の経験は少ない。もし、実は本当に社会に出るという考え方はすごく社会に出たいなという気持ちがよくあります。でも実際ですね、その仕事とか提供の場は少ない。外国人にとって。特に外国人のお母さんにとってこのような場は少ない。まあ、自分が実際に勉強した日本語をですね、日本の社会で生かしたい。協働事業への参加が一つのきっかけになったかもしれない。そのきっかけに自信が

ですね、今まだ自信がないです。だけど、自信を少しずつつけていきたいです。

4) 「韓国語で名前を書く」ボランティアに参加して (2008年3月記)

Rさん (韓国, 女性, 日本人の配偶者)

AさんとBさんからの連絡でした。外国人に韓国語で自分の名前を書けるように！ということでした。日本人以外の外国人に教えるというのは、どういうことなのか、戸惑いはありましたが、初めてでしたので、楽しみと緊張が半分ずつでした。当日はホールに入ってから、想像以上の規模の大きさや色んな国の人々が集まって一生懸命するのを見て、びっくりしました。そして私も頑張らなきゃ！と思いました。

韓国語というのを簡単に説明したら、日本語と文法がほぼ一緒に易しいです。日本語がひらがなやカタカナでできているように、韓国語も子音と母音さえ覚えれば、何でも組み合わせる読むことができるのです。

ボランティアの当日は、子音と母音が書いてある紙をもって行って、外国人の名前をそのまま組み合わせる書くだけでした。私には簡単なことでしたが、韓国語で書いてある自分の名前を見て喜ぶ外国人達を目の前にして、逆に私の方が嬉しくて楽しくて仕方がなかったです。あっという間の時間でした。

私にとって大切な経験でした。皆さんに感謝します。またこういう機会があればぜひとも参加したいと思います。

4. 地域日本語教室のこれから —多文化共生社会を見据えて—

地域で日本語教育支援をするということは、日本での生活をまるごと支援することだろう。「にほんごの会くれよん」に関わりのある4名の学習者の証言からも、日本語支援以外の活動に参加し、日常の生活外での意味ある関わりを持ったとき、自らが、そして子どもたちが変容したことが認められる。

李原翔さんは読み聞かせという場が子どもたちの母親の母語への興味を引き出す契機になったという。また、Fさんの証言からは自らの子ども時代の経験を思い出し、生活にそのよい習慣を取り入れていこうとする姿勢を生み、これからの生活の指標の一つを見出すことができたことが分かる。Oさんはあえて文として記さず、とつとつとした語り口の中から自らの気持ちの変遷を語った。そこには日本での生活の不安いっばいの否定的な気持ちからボランティアをして人の役に立ちたいという肯定的な気持ちを持つに至った過程が克明に語られている。Rさんは日本語学習そしてパートで働く中でいつも受け身の立場であった自分が情報の発信者として未知の人と関わったことの快感を記している。

ここに記した学習者の想いはほんの一握りのものにすぎないかもしれないが、日本語支援と並行して行われた社会へ向けての支援事業は、学習者の生活や気持ちにプラスの変化をもたらしたことは明らかである。

多くの外国人住民はどのような立場での滞在であろうとも、冒頭の詩を書いた学習者のように、自分らしく日本で心豊かな日々を送りたいと願いつつ生活しているのである。その気持ちを実現させるための支援は、外国人の持つ既存の能力を地域で活用できるように梯子をかけてあげることなのではないか。自分が社会でそして家庭で必要とされていると感じるとき、人間は大きな力を持つ。その実感を言語能力の高低にかかわらず感じられる

場、機会を地域日本語教室の支援者が学習者のために計画、実践していくことが必要なのだと考える。こうした支援事業は地域の状況において、異なるものではあろう。しかし、どのような状況の下であっても、言語支援や交流プログラムだけで外国人住民のケアは十分ではないということは認識しておくべきだろう。

これからは、ことばの習得と並行して順次、学習者が本来の自分を実現できる度合を増やしていくような意味ある拡がりのあるプログラムを考えていかなければならない。そのためには周囲の住民、ボランティア、行政あるいは専門家とのよい関係作りと外国人を受け入れていくための新しい枠組み作りが課題だと言えよう。

「地域における新たな文化の創造や育成型の地域社会を目指すためには『外国人住民が日本社会に適応するだけでなく、状況に応じて日本社会の側から変わっていく』というような意識や『対話や協働作業を通じてお互いの特徴をわかちあうことは、ひいては、住みやすいまちづくりに繋がる』という意識を共有することが重要になってくる」(野山 2008)という現状を踏まえ、地域日本語教室も早急な変化が求められている。

多文化多言語共生社会となった今、私たち、地域で活動する日本語学習支援者が、外国人の社会参加を実現するための「梯子をかける」立場にあるということを実感し、また、そのようなプログラムを実践していくことを今後も継続して伝えていきたい。

注

- (1)季刊ジャネット (2005年4月号) あちこち日本語 (国内編)
徳島県徳島市 JTM とくしま日本語ネットワーク紹介記事中の
結婚のため日本に来たフィリピン人女性の詩
- (2)「にほんごの会くれよん」が文化庁委嘱事業として、2006年7月から2007年3月まで、
就学前の子どもがいる人を対象に行った
- (3)李 原翔：東京学芸大学大学院博士課程在学中 (教育心理学専攻)

引用・参考文献

- (1) 氏家洋子 (1997) 「ICAS 創設のころ」『あいかす ICAS10年の歩み』ICAS 国際都市
仙台を支える市民の会 pp.39 - 44
- (2) 西尾珪子 (2005) 「日本語ボランティア活動」『講座・日本語教育学第1巻 文化の理
解と言語の理解』スリーエーネットワーク pp.176 - 188
- (3) 野山広 (2005) 「現代世界の人の移動と日本語教育」『講座・日本語教育学第1巻 文
化の理解と言語の理解』スリーエーネットワーク pp.140 - 154
- (4) 野山広 (2008) 「多文化共生と地域日本語教育支援—持続可能な協働実践の展開を目
指して—」『日本語教育』138号 pp.4 - 13
- (5) 平高史也・野山広・春原直美・熊谷晃編 (2008年) 『共生—ナガノの挑戦』信濃毎日
新聞社
- (6) 元木住江 (2005) 「日本語あちこちご紹介—国内編」『季刊ジャネット』(2005年4号)
4頁 スリーエーネットワーク